

「カムバック・ストーリー」にみる アメリカの史的変遷

朝 日 由紀子

2001年9月11日を経験したアメリカは、いまどのようなストーリーを必要としているだろうか。かつてのような「イノセント（無垢）」がアメリカの精神のキー概念であった時代は去り、いまやアメリカは、歴史的に永久に消し去ることのできない傷痕を身に受けたといえるであろう。未曾有の経験によって生まれた苦しみや悲しみは癒されようもなく10年を経て、アメリカが国家として直面している問題は明らかにされていく必要がある。そのことへの考察の手がかりとして、アメリカの歴史においてある重大な局面となった時期を生きた人々のストーリーをいくつかのジャンルから取り上げ、共通する物語性を浮き彫りにすることが本論の目的である。振り返って、「ピルグリム」たちが新天地での新しいエルサレム建設をめざした17世紀から超大国へと発展をとげる歴史的道程のなかで、アメリカが経験してきたものは何であったのか。以下で考察する作品を検討するなかで鮮明となってくるのは、アメリカ特有の理念的な善悪二元論による裁断の不確実性、あるいは倫理的曖昧性である。

I. 初期ピューリタン社会

最初に取り上げる作品は、ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』（1850年）である。アメリカ文学の黄金時代とされる時期の代表的な作品とされ、また、象徴性に富むホーソン文学の代表作でもあるため、これまで多く

の研究がなされてきた。その主要な関心は、登場人物ヘスター・プリン、牧師のアーサー・ディムズデイル、医師のロジャー・チリングワースの三者の關係に集中しているが、ヘンリー・ジェイムズがその『ホーソン論』で論じたように、『緋文字』はディムズデイルの物語であると捉える批評もある。だが、ここでは、「カムバック・ストーリー」の視点から、とりわけヘスター・プリンの行動の軌跡に注目し、その物語性の意味合いを考察していく。

この小説は、1630年に、「丘の上の町」（マタイによる福音書5章14節）の建設という使命を掲げたジョン・ウインスロップ（1587—1649）に率いられてマサチューセッツに上陸した会衆派のピューリタンたちが、ボストンを建設し始めてまだ20年も経たない時期に設定されている。作品の重要な展開をなす12章で、その初代総督ウインスロップが5月の初め（実際は3月26日である）、その生涯を終えたことが告げられることで、作品の史的事実が明らかにされる。ホーソンは、物語を始める前に、「自伝」と称する「税関」という序章をもうけ、ウインスロップとともに1630年に移住してきた最初の先祖ウィリアム・ホーソンについて、「ピューリタンの特質をすべて備えていた」といい、「クエーカー教徒」に対して厳しく迫害したことに言及している。そして、二代目ジョン・ホーソンについても、「迫害の精神を受け継ぎ」、セイラム魔女裁判の判事をつとめ、「その名をとどろかせた」と紹介している。初期ピューリタン社会の指導者であった祖先の直系として、ホーソンは、史料として存在するだけではない過去に強い「絆」を感じている所以を語るのである。

またこの「自伝」の後半では、勤務する税関の一室で見つけた、古びた「緋色の布」に惹きつけられ、さらには「ヘスター・プリン」の生涯を物語る記録文書と出会い、ホーソンは、その物語の「主題」について深くまた多くの時間を費やして熟考した、という事実が語られている。主要な

事実は、その記録を残した関税検査官の文書により、その「信憑性」は保証されているが、「物語上の事実」はホーソーンの自由な裁量によるものであり、読者は、『緋文字』にホーソーンのいう「物語上の事実」を探索することになるのである。

物語は、ヘスター・プリンの繋がれている「牢獄」の場面の描写から始まり、つぎの広場の場面で、「宗教と法律」をほとんど同一視していた初代ピューリタンたちの懲罰に対する厳しい態度が描写される。広場の群衆のなかで、とくに、決定された刑罰の内容に対する憤懣を吐き出す数人の女性たちの率直な発言が、死刑に匹敵する罪を犯したとされるヘスター・プリン登場の場面の劇的な効果を生み出している。

1. 牢獄から処刑台へ そして牢獄へ

三か月の赤子を胸に抱いたヘスターが牢獄から現れたとき、胸には赤い布地に金糸で刺繍された文字「A」が人目を奪うほど鮮やかに浮かび上がる。それは、姦通罪を表示する「緋文字」であった。その服は、獄のなかで作ったものであったが、当時の「贅沢取締令」の許容限度をはるかに越える華麗なものであった。ホーソーンの描写の焦点は、ヘスターの内面に立ち入るよりも、ピューリタン社会の人々の目に映る外見と行動にある。その長身で大柄な体格に加えて、厳しい非難をこめた視線のなかを堂々とした態度を保持しながら処刑台にむかうヘスター・プリンは、すでにその服装を獄中で身につけたときから試練に耐える覚悟ができていたといえるであろう。

処刑台で晒し者となっているヘスター・プリンに、魂の救いに責任のあるディムズデル牧師が、年長のウィルソン牧師に促されて、罪の共犯者の名前を告白するよう説得する場面でも、決然とその名を明かすことを拒絶する。その後のウィルソン牧師の緋文字をめぐる長い説教にも耐え、再び牢獄へ連れ戻される。ホーソーンは、ヘスター・プリンが「苛酷な苦

しみを気絶して逃れる」ことなく肉体の力を保った、と特筆する。

獄中であらたな試練の時となるのは、処刑台のヘスターを群衆に混じって見つめていた夫のロジャー・チリングワースと面会する場面である。ホーソンがチリングワース像をどのように造形したか、作品論の興味深い点であることは間違いない。結婚しても愛情を抱いていなかったと語る妻に、チリングワースは、妻の不義を一方向的に責めることなく、年若い、不具者である自分が人生の温かさをヘスターに求めたことが悪かったと認める。そして、ヘスターに対して復讐はしないと告げる。だが、相手の名前を聞き出そうとして拒否されたチリングワースが、この時その秘密を探ることへの情熱に火をつけたことはたしかである。やがて、ディムズデルの心に、チリングワースの探究のメスが入られるようになり、その対象に魅入られるにいたるチリングワースの「罪」とは何か、という問題が現れてくる。しかしながら、この獄中の場面でチリングワースが吐露した心情を受けとめるならば、その人間的な側面を見せたチリングワースに「悪」の烙印を押すことはためらわざるを得ない。

2. 牢獄から廃屋へ

刑期を終え、牢獄から出たヘスター・プリングが、つぎにどのような行動をとったかという点に、ホーソンは関心を抱く。ピューリタン社会のなかで生き続けようとするなら、ヘスターは、「個人としての人格を失い、一般的な記号」となって、罪の化身の典型となるほかはない。にもかかわらず、ヘスターは、生まれ故郷のイギリスに戻ることも、ピューリタン社会の圏外に出ていくこともしなかったことに、ホーソンは「驚嘆」するのである。

ヘスターは、人里離れた海岸に廃屋となっていた家をすまいとし、高度な技術の針仕事をして娘パールとの生活を支えていく。質素で地味な服装が一般的であったピューリタン社会であっても、公の儀式の折に高い地位

にある者が威厳を示すために身につける衣装や、葬式の衣装の仕事の依頼が多くきたのである。ただ、「一度も花嫁の白いヴェールを刺繍する」仕事の注文がなかったことは、ヘスターの罪に対する社会の厳しい姿勢を物語っている。胸の緋文字は、社会のあらゆる階層の人々から、子どももそして見知らぬ者たちからも、容赦なく無慈悲な仕打ちをうける定めをヘスターに刻印するものであった。緋文字を身に帯びることは、ヘスター・プリンに牢獄同然の生活を強いたのである。

こうしてヘスターが耐え忍んできた7年の間、一方のディムズデイルは、おのれの心のうちに隠蔽された罪におののき、苦悩に苛まれていた。そして、5月初めの真夜中、はじめて、かつてヘスター・プリンが立った処刑台にのぼり、「見かけばかりの罪滅ぼし」をするがそれに耐えきれず恐怖心から思わず叫び声をあげてしまう。茫然自失となるディムズデイルのそばを、天国に旅立ったウインスロップ総督を見送ってきたウィルソン牧師が通りすぎていく。この日、初期ピューリタン社会の要であった精神的支柱が倒れたのである。同じく、長衣の寸法を取りにウインスロップ総督の家に行っていたヘスターと娘パールが、処刑台の所まできて、ディムズデイルと出会う。3人はともに台の上に立つことになるが、パールから、明日の昼いっしょに台の上に立ってほしいといわれ、ディムズデイルは、恐怖心に圧倒され、パールの願いを断る。そのときヘスターは、牧師の心身が極度に衰弱しているのを見てとるのである。

3. 森へ

ヘスター・プリンは、ディムズデイルの苦悩が深刻度を増していく背景に、チリングワースの存在があることを見抜き、ディムズデイルにチリングワースの正体を打ち明けることを決意し、森に向かう。森の小道を歩いてくる牧師に「アーサー・ディムズデイル」とその名前で呼びかける。ヘスターに出会った牧師は、たとえいくら懺悔や苦行をしてもまったく魂の

救いには意味がなく、どんなに惨めな状態にいるか告白する。ヘスターは、医師として牧師の治療にあたっているはずのチリングワースがじつはだれであるか、明らかにする。思いもよらず、自分のそば近くにいる敵の存在を知り、ディムズデイルは、「自分たちがこの世で一番の罪人ではなく」、チリングワースこそ墮落した牧師よりも悪い人間であり、その復讐は、「神聖な人間の心を犯した」ゆえに、自分が犯した罪よりも邪悪だ、とヘスターに語る。ここでのディムズデイルの発言は、ヘスターとの共感に頼ったものなのか、あるいは、神の前に出た牧師としてのものなのか、曖昧といえよう。

悲嘆にくれるディムズデイルに、森から自由な世界へと逃れる道があると、ヘスターは大胆に語りかける。海を渡ってヨーロッパに行けば、チリングワースの手から逃れられる希望があると力強く説得するが、牧師には、ひとりで新しい世界に出ていく勇氣も力もない。ヘスターは、ディムズデイルと行動を共にすることを約束し、プリストルへ4日後に出帆する船の船長と交渉して、3人の乗船の手配をする。牧師がその知らせに心が動いた理由を読者に知らせるのは躊躇するが、とホーソーンは断りながら、その事情を説明する。3日後に、ディムズデイルは、ニューイングランドの牧師にとって非常な名誉となる「選挙祝賀の説教」を予定していたからである。

4. 処刑台へ

新総督就任の祝賀が行われる当日、ヘスターと船長は言葉をかわず。その時、船長はヘスターたちと同行したいという乗船客がひとり増えたと知らせ、ヘスターを驚かせる。それはチリングワースのことであった。教会での説教壇で力を尽くした説教をディムズデイルが終えたとき、ヘスター・プリンは、胸に緋文字を付けて処刑台のそばに立っていた。ディムズデイルは、説教壇から処刑台に向かい、そこにヘスターとパールを招いて、3

人の絆をはっきりと人々の前に示したのである。チリングワースも、「最後の舞台に登場する」にふさわしいかのように、3人と共に処刑台に立った。牧師は、処刑台で群衆にむかって自分の罪を白日の下にさらし、息絶えた。

こうして罪と罰のドラマは幕を閉じるが、「物語上の事実」が重要となってくるのは、その後のヘスターの行動である。処刑台での牧師の最期からほどなくして、チリングワースも息を引き取り、ヘスターとパールの消息は途絶える。チリングワースは、遺言状でアメリカとイギリスにある莫大な財産をパールに遺贈し、パールは、「新世界の富裕な女相続人」となった事実が読者に知らされる。

5. 緋文字へのカムバック

ヘスター・プリンは、やがてイングランドからニューイングランドにひとり戻ってきて、再び緋文字を今度は自らの意志で身につけ、真実、人生を刻んだ廃屋で再スタートしたのである。緋文字の意味は、厳しい苦難を乗り越えるなかで、利他的な生き方に徹したヘスターに対する尊敬の念が人々の間でしっかりと定着していくにつれて、まったく変化していった。ヘスター・プリンの選択した行動の軌跡をみると、一度は森のなかでイノセントな世界への憧れをディムズデルに語ったが、終局的には、自分の過去の歴史を消去する生き方ではなかった。再度大西洋を越えて、ピューリタン社会にカムバックすることによって、過去の土壌のなかに根を下ろし、新たなアイデンティティを育て上げ、悩める人々のために献身した「ヘスター・プリン」の物語として、ホーソーンの『緋文字』は捉えることができるのである。

II. 第二次世界大戦と戦後

20世紀に入り、アメリカはふたつの世界大戦を経験する。第一次世界大

戦の場合、当初、ウィルソン大統領はヨーロッパで勃発した戦争に介入しないという「中立宣言」を発表したが、1917年になってから対独宣戦を決意し、議会で承認を得た。その理由は、「民主主義にとって安全な世界」を構築するためであるとし、この戦争は「聖戦」と呼ばれたのである。それに対し、第二次世界大戦への参戦はどうであったか。1939年イギリスとフランスがドイツに宣戦し、第二次世界大戦に突入したが、アメリカの世論は、反ファシズム感情を抱いていたものの、参戦には反対であった。それが一変したのは、1941年12月7日、日本軍による真珠湾攻撃によって、「リメンバー・パールハーバー」がアメリカ人感情に強く突き刺さる言葉となったからである。フランクリン・ルーズヴェルト大統領は、すでに英仏が宣戦したときから、アメリカの参戦を予測しており、むしろこのときにアメリカにとっての日米開戦の明白な正当性が与えられたといえる。しかも、戦争を終結するためという名目で、トルーマン大統領発令による、広島と長崎の一般市民の計り知れない犠牲を強いた原爆が投下された事実は、政治における倫理の欠如を物語っている。

このような戦争を実際に体験したアメリカ人兵士ジェイコブ・デシェーザー (Jacob DeShazer, 1912-2008) を取り上げ、その戦時と戦後を通じてのカムバック・ストーリーとはどのようなものであったか、以下で検討する。

1. 真珠湾攻撃への報復

真珠湾攻撃に関してまっさきに想起される人物は、360機を率いて真珠湾を空襲し、「我奇襲に成功せり」と「トラトラトラ」の電報を打った淵田美津雄であろう。淵田は、昭和13年海軍大学校を卒業後、14年に第一航空戦隊「赤城」飛行隊長になり、16年中佐に任官、11月18日、極秘裡に旗艦赤城で択捉島の単冠湾に出動、待機、そして12月7日、真珠湾の迎撃態勢いかんで、奇襲か強襲かを決定する作戦がとられたため、偵察の結果

「奇襲」の発令を下し、任務を遂行する。淵田は1976年に亡くなるが、それから30年を経て、淵田の「自伝」が編集され、『真珠湾攻撃総隊長の回想 淵田美津雄自叙伝』として出版された。そのなかに、ジェイコブ・デシェーザーに触れた箇所があり、きわめて興味深い。1949年12月3日、淵田は渋谷駅前の広場で、アメリカ人が配布している冊子を受け取る。その題は、「私は日本の捕虜だった」というものであった。まず淵田の興味をひいたのは、その著者が、真珠湾攻撃を知り日本に対する敵愾心に燃え、ドゥリトル爆撃 (Doolittle Raid) 隊に入ったということ、そして「東京初空襲のドゥリトル爆撃隊の16番機の爆撃手ジェイコブ・デシェーザー」であったことである。この獄中回想記を読んだことで、戦後の淵田の人生は大きく転換していく。1951年に受洗し、1954年、淵田自身『真珠湾からゴルゴダへ わたしはこうしてキリスト者になった』という布教のための冊子を出版することになるのである。

2. 日本本土空襲

ジェイコブ・デシェーザーは、1941年12月7日当日、軍の炊事当番をしていたが、ラジオで突如真珠湾奇襲のニュースを知り、憤激にかられて手にもっていたじゃがいもを壁に向かって投げつけたという。翌日の8日、米英両国は、日本に対して宣戦布告をした。しばらくして、デシェーザーは、隊長から呼ばれ、全く説明されないまま、危険な任務に参加するよう志願をすすめられる。日本に対する憎悪から、日本に報復する絶好の機会と思い、志願する。それから指揮官のジミー・ドゥリトル中佐のもと、爆撃手となる訓練をうける。一か月後、1942年4月1日、サンフランシスコで、搭乗機B25の全16機が空母ホーネットに積み込まれ、ゴールデン・ゲートを抜けた後、目的地は東京とアナウンスされたのである。日本の400マイル沖合から、爆撃機は、東京、横浜、名古屋、神戸にむけて出撃する予定であった。デシェーザー機の目標は名古屋で、デシェーザー爆撃手は、

名古屋市の石油タンクには爆弾を投下し、工場には焼夷弾を放った。内心、真珠湾の仕返しをしたという快感を味わっていたのである。爆撃後、伊勢湾に出たデシェーザーは、漁船をいくつか見つけ、そこでみなが手を振っているのを目にする。日本機でないことを知らせるため、デシェーザーは、漁船にむけて機銃掃射をしたという。

3. 日本軍捕虜

B25爆撃機は日本空襲後、中国大陸にむかい、蒋介石空軍の飛行場に着陸する予定であった。だが、燃料不足により、落下傘で降下するよう命令が下り、デシェーザーは無事着陸できたものの、そこはまったく不案内の場所であった。あらかじめ訓練中に、中国人と日本人の見分け方を習っていた。それは、「足を見ろ」というもので、「日本人が、親指と他の指とが離れているのに対して、中国人の足の指は、全部くっついている。」と教えられた。しかし、実際にはこの見分け方は役に立たなかった。デシェーザーは日本軍占領地域で逮捕され、監房に入れられ、東京憲兵隊の拷問による取り調べが始まった。上海の軍律会議での裁判で、捕虜8名全員死刑の判決が下った。だが、なぜかデシェーザーを含めた5名は、無期監禁に減刑され、3名の捕虜が銃殺刑に処された。捕虜収容所では、デシェーザーは、到底耐えられないほどの虐待を経験し、収容所の看守に対する憎しみと恨みを極度に募らせていった。

だが次第に捕虜収容所にも少しずつ変化が現れ、ある時、本が5冊差し入れられ、そのなかの1冊が聖書であった。捕虜たちは順番でそれら本を読み、デシェーザーの手元に聖書が渡ったとき、旧約・新約を繰り返し読んだ。デシェーザーの心は変えられていく。看守に怒りや恨み、復讐心を抱くのではなく、「敵を愛し、ゆるすこと」をみずから実践しなければならぬと気づき、看守に「おはようございます」とあいさつの言葉を口に始めた。それからは、限られた日本語で、看守の家族のことなど親身に

たずねるようになった。ある日、看守がふかしたサツマイモを差し入れてくれ、それほどおいしい食べ物を長い間食べたことがなかったデシェーザーは、心から感謝し、看守と捕虜との関係に変化が生じたことを実感したのである。

4. 日本へのカムバック

戦争が終結して、独房で過ごした184日を含め、3年4カ月の捕虜収容所での日々も終わりを告げた。デシェーザーは捕虜収容所にいるときから、いずれ日本に宣教師として戻ることを決意していた。除隊後、シアトル・パシフィック・カレッジで学び、宣教師の資格を得たデシェーザーは、妻子とともに、1948年12月14日サンフランシスコから日本への船出をした。6年半前、軍艦ホーネットの甲板に立ち、同じゴールデン・ゲート・ブリッジを見つめていた時のデシェーザーは、真珠湾攻撃への報復を使命とする怒れる爆撃手であったが、こんどは宣教師としてまったく異なる使命を抱いての日本への回帰であった。

デシェーザーは、日本に到着するとすぐ全身全霊で伝道活動を開始する。わずか二か月の間に教会、学校、公園、公会堂、工場、炭鉱など200箇所以上で話をした。1949、50年と伝道活動が広範囲に続けられていったなかで、1950年、デシェーザーは驚くべき経験をする。淵田美津雄が訪問してきたのである。淵田は、デシェーザーの獄中回想記と出会い、聖書を読み始めたことを打ち明けた。かつて敵同士であった二人が、今はともに祈りあう姿となったのである。これをきっかけに二人は共同して伝道集会を開くようになり、大勢の人々が熱心に二人の言葉に耳をかたむけた。

1955年4月、すでに日本滞在は6年に及び、デシェーザーは一時休暇をとってアメリカに帰っていった。デシェーザーは、第二次世界大戦が終わって10年経ってなお、まだ多くの戦争犯罪人が死刑執行を待って収監されていた問題に取り組む責務を感じていた。デシェーザーは、アメリカ軍当

局にあてた手紙で「わたしは日本の天皇に永久に変わらない感謝の気持ちを持っています。あとき処刑されていたら、永遠に地獄にいなければならなかったでしょう、なぜならクリスチャンではなかったのです。」と自分の体験から訴えた。さらに、「私たちの国は、原爆を投下した最初の国です。こんどは慈悲を示す最初となりましょう。」と、デシェーザーは呼びかけたのである。

1955年秋、デシェーザーは神学修士号を取得するために進学することを決める。3年間のケンタッキー州アッシュベリー・セミナリーでの勉学の間もずっと、日本で宣教師として用いられる最上の方法について、デシェーザーは考え続けていた。そして、名古屋で新しい取り組みを始める決意をフリーメソジスト教会のミッション・ボードに提案し、許可されたのである。名古屋は、いうまでもなくドゥリトル爆撃隊のデシェーザーたちの16機が爆撃した都市である。そこに教会をたてることには、宣教師となったデシェーザーにとっては特別な思いがあった。1958年12月31日、サンフランシスコを発ち、捕虜収容所から始まった長い道のりを経て名古屋へのカムバックを果たしたのである。夫妻は、協力して教会を立ち上げ、地域の人々と親しく交わり、子どものためのクラスや英語のクラスも設けた。教会は、着実に発展していき、教会への新入会員の数も増え続けて、教会の土台がしっかりと築かれた1964年に、夫妻は日本人の牧師に教会の責任を任せることにしたのである。その後も、日本各地で信仰の種をまき、1977年、デシェーザー夫妻は、宣教師として29年間献身した伝道の地日本での使命を終え、帰国したのである。

Ⅲ. ウォーターゲート事件

公民権運動とベトナム反戦運動がアメリカ社会を揺るがす運動の気運となる1960年代の幕開け、1960年の大統領選挙で、民主党候補のジョン・F・

ケネディと共和党候補のリチャード・ニクソンが対決し、わずかな差でケネディが大統領に就任した。このとき敗れたニクソンは、1968年の大統領選挙で、再度立候補し、こんどは勝利を収め、第37代大統領に就任する。この新大統領がその力量を見抜き、ホワイトハウスに招いたのが、コルソン・アンド・モリン法律事務所の共同経営者チャールズ・コルソンである。1969年11月から1973年3月まで、大統領特別補佐官を務め、ニクソンの側近中の側近として敏腕をふるったチャールズ・コルソンをカムバック・ストーリーのひとつとしてここで取り上げる。大統領の威信を著しく傷つけることになったウォーターゲート・スキャンダルが発覚し、ニクソン大統領二期目の1974年3月1日、大陪審によって起訴されたニクソンの側近たち「ウォーターゲート・セブン」のひとりがコルソンである。ウォーターゲート事件は、アメリカの政治倫理を根底から揺るがしたが、同時にコルソンの人生の重大な転換点となった。

1. ホワイトハウスから刑務所へ

この表題は、チャールズ・コルソンの「自伝」、*Born Again* の序章で使われているフレーズである。冒頭、こう始まる。「ある意味で、わたしはすべてのものを失った— 権力、威信、自由、わたしのアイデンティティすらも。1974年の夏、マックスウェル刑務所で囚人番号23226として、わたしは小さな白黒テレビの画面を見つめていた。国中のほかの人々と共に、わたしが3年半忠実に仕えたりチャード・ニクソン大統領が辞任するのをじっと見守ったのである。」ここに、端的に、権力の中枢部からどん底に転落したコルソンの人生が集約されている。

そして、この本の執筆のきっかけが語られる。「その刑務所のわびしい閉ざされた中で、わたしは走り書きを始めた。わたしの人生の劇的な変化とホワイトハウスから刑務所に至った意味が何であったのかを説明しようとして。」

本書は、1972年、ニクソン大統領が再選されたときの、不思議にも歓喜よりも不気味な空気がホワイトハウス周辺に漂っていたことから説き起こされる。4年前の大統領選とは、何と対照的なことか、とコルソンは感慨をもちます。コルソンが初めてリチャード・ニクソンに出会ったのは、アイゼンハワー政権下でニクソンが副大統領であったときである。ニクソン大統領が誕生したとき、コルソンは、密かにホワイトハウスから電話がかかってくることを期待した。「大統領」が「わたし」を必要としていることを伝える電話を。そして、たしかに1969年の晩秋、ホワイトハウスから電話がかかってきたのである。大統領執務室でまさに「大統領」、世界で最も重要な人物、と二人きりでいるという実感、しかも大統領のスタッフとして、コルソンの38年の人生はいまや満たされようとしている、という思いであった。

ホワイトハウスでは、ジョン・ミッチェル司法長官、ジョン・アーリックマン、H.R.ハルドマンなど「ウォーターゲート・セブン」と呼ばれるようになるニクソンの側近たちの面々、ヘンリー・キッシンジャー国務長官などと交わるなかで、コルソンは、アメリカ国内外のあらゆる重要な機密にも通じていくようになる。コルソンは、大統領が対処しなければならないすべての分野、「ベトナム戦争やインフレーションやロシアとの外交交渉」に関する相談役であり、問題処理役でもあった。大統領にぴったり付きそうコルソンを評して、『ニューズウィーク』誌（1971年9月6日）は、「大統領が執務室からヘリポートまで歩く間、一歩ごとに大統領の左耳に早口で語りかける人物がチャク・コルソンだ。」と書いたが、どんな犠牲を払ってでも大統領のために仕事をするコルソンに、「ニクソンのハチェト・マン (hatchet man)」という怪しげなタイトルをつけたのは、『ウォール・ストリート・ジャーナル』（1971年10月15日）であった。その意味は、記事の見出しで明らかである。「ニクソンのハチェト・マン—チャ

ク・コルソンは、大統領の面倒で厭な仕事の請負人だ。」

1972年11月の大統領選挙にむけてコルソンは全力をあげ、ニクソンは圧倒的勝利による大統領再任をきめる。それにもかかわらず、すでに触れたように、コルソンの心理に微妙にウォーターゲート・スキャンダルの暗雲が影を落とし始めていた。1973年3月10日、大統領特別補佐官を辞任して、ホワイトハウスを去り、ワシントンの法律事務所の仕事に復帰する。

2. 新生

Born Again の7章で、コルソンの人生の転換点の契機が語られる。ニューイングランド最大のエレクトロニクス会社のレイセオン社からの依頼で、コルソンはボストンに行き、社長のトム・フィリップスと話す機会をもつ。トムは、ウォーターゲート事件にコルソンが関与していると取り沙汰されていることへの心配から声をかけたのであった。コルソンは、トムに「直接的にも間接的にも不法侵入にはまったく関与していない」と話す。トムの目にはコルソンがそれまでにまったく感じられなかった同情と、声には優しさがあった。トムは「イエス・キリストを受け入れた」ことを告白し、「またの機会にもっとくわしく話したい」という。トムの言葉は、ウォーターゲート事件が影をおとすコルソンの心に残る。

そして次の8章「忘れることのできない夜」で、コルソンは、トムと再会し回心体験を聞くことができ、トムからC.S.ルイスの *Mere Christianity* を渡される。トムは、会社を成功させるために全精力を費やしてきたが、一方、自分の人生に大きな穴があいていると感じていた。ニューヨークに出張の折、ビリー・グラハムがマディソン・スクエア・ガーデンで伝道集会を開くことがわかり、そこに行き、過去の自分にはイエス・キリストとの関係がなかったことがわかった、と語る。トムが、コルソンの心が開かれることを真剣に願っていることはひしひしと伝わってきたが、コルソンは、その祈りに応えられないままトムと別れる。だが、トムの家からあま

り離れていない暗闇の中で一人になったとき、涙があふれ出てくる。それは「悲しみと悔恨の涙でもなく、また喜びの涙でもないが、なぜか安心の涙」であった、とコルソンは回想する。そして、そのとき初めて、コルソンは、心から祈ることができたのである。

3. 服役

1974年3月1日、コルソンは、ウォーターゲート・ビル侵入事件の隠蔽工作疑惑で起訴された。事件の審理中、コルソンは、疑惑を否定し続けたが、コルソンには「ニクソンのハチェト・マン」という強烈なイメージがつきまとい、マスコミも世論もけっしてコルソンに好意的とはいえなかった。コルソンは、憲法修正第5条の黙秘権の行使という弁護士のアドバイスを受け入れたが、無実の罪を否定できない状態に対する心の葛藤に苦しむ。結局のところ、コルソンは、ウォーターゲート事件に直接関与した点ではなく、関連するペンタゴン・ペーパーズ漏洩事件のダニエル・エルズバーグの名誉毀損工作をした司法妨害の点で有罪を認めた。その結果、コルソンは、モントゴメリー空軍基地にある連邦刑務所に移送される。そのマックスウェル刑務所のなかで、コルソンの人間観に変化が生じたことが26章で述べられている。「善人と悪人とのはっきりした区別などまったくないことをまもなく発見した」のである。また、服役囚と看守との軋轢は、服役囚一人一人の問題に対処しようとしめない看守側の姿勢から生まれることを知る。数多くの実例を目撃するが、ある時、一人の若い服役囚が「兄が亡くなったから、葬式に出るため家に帰らなくてははいけないんです。」と、悲しみをたたえた目で当直に助けを求めているのを、コルソンは見る。看守は、一言の同情の言葉もなく、面倒くさそうに、書類に記入してから来い、そうでなければどうにもならない、と横柄な態度で追い返したのである。その青年の打ちひしがれた様子と、看守の嫌悪感をあらわにして椅子にどっかりとすわる傲慢な態度とに、コルソンは拭いえない印象を受け

たのである。

4. 刑務所へのカムバック

マックスウェル刑務所を出所した日、コルソンは、すぐにまたそこに戻るとは気づいていなかった、と「エピローグ」で語っている。最初は、刑務所内で始めていたコルソンのバイブル・クラスの服役者たちを訪問するためであった。だがそれ以降、刑務所を再訪することが、コルソンに与えられた召命となるのである。コルソンは、刑務所に収容されている人々の記憶があまりに鮮明に心に刻まれていて、法曹界にもどる可能性もあるなかで、これからの人生の在り方がなかなか決まらない日々を送っていた。ついに自分のなすべきことは、刑務所でみずから経験したことを踏まえ、服役囚の福利向上をめざす刑務所制度の改革であることを自覚する。コルソンは、「プリズン・フェローシップ」を構想し、1976年に設立するのである。*The Faith* には、プロテスタントとカトリックとの激しい抗争の只中にあつた北アイルランドで、カトリックの囚人とプロテスタントの囚人とともに、「プリズン・フェローシップ」が協働して、1983年に思い出深いカンファレンスをクイーンズ大学で開いたことが記されている。そしていまでは、アメリカだけでなく、「プリズン・フェローシップ・インターナショナル」が組織され、112カ国にコルソンの精神は根付いているのである。

IV. 経済危機

2008年に投資銀行リーマン・ブラザーズが、前年のサブプライムローン問題の影響を受けて破綻したことにより、世界的な金融危機を招いたことは記憶に新しい。世界経済は、その後遺症から依然として回復しておらず、ギリシャを震源地とする新たな経済不安も生じている。これらのことは、世界の金融の中心地ニューヨークで、最近、「ウォール街デモ」が起こっ

ている社会現象にもつながるであろう。「ウォール街を占拠せよ」のスローガンは、ウォール街がアメリカの経済格差を作り出す象徴となっていることを示すものである。抗議運動は、ニューヨーク以外の都市にも波及しているが、「我々99%は、(富裕層である)1%の人々の強欲と腐敗をものはや許さない」という点で共通していると、新聞は報道している。ウォール街と投資銀行が作り出す金融市場と強欲のテーマは、2010年に公開された映画『ウォール・ストリート』のテーマにぴったり重なる。監督のオリバー・ストーンは、リーマン・ショックによる経済危機の現状を見据えながら、物語を「ゴードン・ゲッコーのカムバック・ストーリー」として展開しており、その意味で、この映画作品を取り上げ、物語が提示する倫理の問題を考察したい。

1. ゲッコーの服役と出所

1987年に公開された『ウォール街』では、強烈な個性を発揮したゴードン・ゲッコーが、インサイダー取引の嫌疑をかけられるところで結末となるが、今回の作品は、連邦刑務所の場面から始まり、そのゲッコーが出所する姿を映し出す。同じく出所するほかの服役囚には、迎えてくれる家族がいるが、ゲッコーはひとり刑務所の門の前で立ちつくす。場面はスピーディーに展開し、次にゲッコーが登場するのは、それから7年後の2008年とされ、まさにリーマン・ショックが起こる直前に設定されている。「ミスター・インサイダー」と紹介されたゲッコーが、フォーダム大学の大勢の学生たちを前にして講義する姿は、8年の刑務所暮らしにもかかわらず、いささかもそのカリスマ性を失っていないことを示している。「君たちは、ニンジャ (NINJA) 世代だ。No income, No job, No assets」と言い切る。経済危機の時代に生きる若者たちは、「所得なし、職なし、資産なし」世代というのは、巧みに言い当てた表現であろう。こうして次々と繰り出す経済情勢の鋭い分析は、聞く者に、そして見る者に、現代の経済活動の虚

偽性を理解させるものである。前作でのゲッコーのセリフ「強欲は善」を踏まえて、今日では「強欲は合法だ」といって学生たちを喜ばせるが、それもまさに至言といえよう。また、「昨年のアメリカの企業の利益の40%は、金融取引で得たものであって、生産利益ではない」と指摘し、それを「ステロイド金融」と名付けた点もここ最近の金融危機の病根を摘出している。

2. ふたつのプロット

確信と自信にみちた言動を見せるゲッコーは、ゲッコー伝説の復活を思わせるが、実際には、ウォール街と実の一人娘の両方から、刑務所に服役していたという理由で、完全に拒絶される。映画の展開のなかで、どのように投資家として再びウォール街から正式な認知をうけるか、また、家族の不幸の責任はすべて父親にあると思込んでいる娘から父親として認知されるかというふたつのプロットが、ゲッコーのカムバック・ストーリーを構成する興味ある見所といえよう。

3. ウォール街へのカムバック

オリバー・ストーンは、最終的にふたつのプロットを見事に融合させたといえる。ニューヨークを離れロンドンで投資家として再スタートし、成功をおさめたゲッコーは、ゲッコーを刑務所に追込んだ相手、ウォール街の金融業界を牛耳るブレトンの投資のからくりが暴かれ、信用が失墜した後、ウォール街の最長老の信用を獲得し、提携することにも成功する。と同時に、娘が生きがいとして力をいれている次世代のクリーン・エネルギーの開発に、一億ドルを出資したことを伝えるため、娘のもとにロンドンからカムバックし、娘との和解に成功するのである。ゲッコーが娘の夫にむかって、「裁判が5年、刑務所が8年、懲役8年は異例だ、殺人でも5年だから。」と語る場面がある。ゲッコーが刑務所にいた長い8年の間に、経済危機の顕在化と家族の亀裂とが進行していたが、それら現実を直視し、回復可能な生き方に覚醒させたのは、刑務所のなかで失われた8年の年月

だともいえるのである。

上でみた4つのストーリーは、いずれも、特定の時代状況のなかで、犯罪人として断罪され、人生の重大な局面に直面した人物たちが、人と人とを隔てる「見える壁」、そして「見えない壁」の中で生きる経験を通して、かつての自分が生きた世界にカムバックする姿を描き出したものである。それは、たんなるカムバックではなく、過去の自分の上に新しいアイデンティティを築き上げ、世の人々や、愛する人に献身する姿である。こうしたひたむきな姿勢こそ、アイデンティティを失いつつある現代のアメリカが必要とする重要な要素ではないであろうか。

引用文献

- Benge, Janet & Geoff. *Jacob DeShazer: Forgive Your Enemies*. YWAM Publishing, 2009.
- Colson, Charles. *Born Again*. Hendrickson Publishers, 1995.
- Colson, Charles and Harold Fickett. *The Faith*. Zondervan, 2008.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter and Other Writings*. W.W.Norton & Company, 2005.
- James, Henry. *Hawthorne*. Biblio Bazaar, 2009.
- 甲斐克彦『真珠湾のサムライ 淵田美津雄』光人社 2008年
- 中田整一編『真珠湾攻撃総隊長の回想 淵田美津雄自叙伝』講談社 2010年
- オリバー・ジェームズ『オリバー・ストーン』小学館 2000年
- オリバー・ストーン監督映画 *Wall Street — Money Never Sleeps —* 20世紀フォックス 2010年
- 『読売新聞』2011年10月3日

淵田美津雄とジェイコブ・デシェーザーの小冊子 (Pocket Testament League 発行) を、ペニンスラ・フリーメソジスト教会 (カリフォルニア州レッドウッド市) の糸井潤子さんより提供していただきました。感謝申し上げます。